コンディヤックにおける文体の美とキャラクテール

小穴晶子

序

十八世紀の西洋の思想、特に美学思想において、キャラクテールという概念は極めて重要な意味を持っているにもかかわらず、この概念が検討されることは従来ほとんどなかったと言ってよい。その理由の一つは、キャラクテールという言葉が、人間の性格を始めとして、文字や記号までをも指し得る多義的な言葉であり、しかも、美学思想のみならず至る所で用いられるため、テクニカルタームとして成立しにくかったことにあると思われる。しかし、この時代の個々の思想家の美学に関するテクストを具体的に検討してみると、ニュアンスの異なりはあるにしても、キャラクテールという概念が重要な役割を演じていることが少なからず見出される。既に二つの別稿[1]において示したように、十八世紀フランスの音楽美学者シャバノンは、模倣論に代わる新たな考えの基礎としてこの概念を導入している。また、『百科全書』のキャラクテールの項目を検討し、啓蒙主義思想一般におけるこの概念の重要性を指摘した論文[2]もある。

そこで本論においては、十八世紀フランスの哲学者コンディヤックを取り挙げ、彼の思想においてキャラクテールの概念がどのようなものとして論じられているかを明らかにしたい。彼は、イギリスの哲学者ロックの考えを継承しつつ、さらに独自の言語起源論を展開して、この時代のフランスの思想に多大な影響を及ぼした。ディドロやルソー

と定期的に集まって、哲学的な問題についての討論を重ねたことはよく知られている。[3] また、前述のシャバノンの音楽美学に対しても少なからぬ影響を与えている。[4] コンディヤックの場合も、キャラクテールの概念はその美学思想において重要な意味を持っているが、中心は、文体の美と言語のキャラクテールの関係の問題である。従って、本論文ではこの点に的を絞り、[5] 文体の美と言語のキャラクテールとはいかなる関係にあるのか、また、コンディヤックのキャラクテールの概念の特徴はどのようなものであるかについて検討したい。

一　問題の場

まず、『文章術』[6]の冒頭を引用しよう。「殿下、二つのものが文体の美全体を形作っています。明晰さ（netteté）と性格（caractère）です。[7]」『文章術』は、コンディヤックがパルムの皇太子の家庭教師であった時の「講義集」の一部を成しているが、その最初に、文体の美を形成する二つの要素のうちの一つとしてキャラクテールが挙げられている。これを見れば、コンディヤックがキャラクテールという言葉を単に一般的な用法で用いているのではなく、文体の美を考える上での鍵となる概念として特別に取り扱っていることは明らかである。

彼のこのような考え方は、多少の視点の異なりはあるが、最も初期の著作『人間認識起源論』[8]においても既に見られるものである。ここでは、『文章術』におけるように文体の美と言語のキャラクテールとの直接の関係は問題とされてはいないが、文体の美を生み出すすぐれた作家の能力と言語のキャラクテールの関係の考察によって、同じテーマが取り扱われている。[9] それゆえ、『人間認識起源論』を手掛りとして問題の場を明確にしておきたい。

コンディヤックがこの著作の中でキャラクテールの問題を論じているのは、第二部「言語起源論」の最後の章[10]においてである。この章でコンディヤックは、génie という言葉を二つの意味で用いている。一つは、天才という意味で

あり、一般的に言えばこれがgénieという言葉の主要な意味であると言える。もう一つは、特性という意味であり、この場合はキャラクテールとほぼ同義となる。実際、彼はこの章で、特性という意味でのgénieとcaractèreという言葉を同義語としてほとんど区別なく、言語、政治体制、国民に関して用いている。[11] 一般にこれら二つの意味は関係のない別のものとされ、辞書においても項を分けて出ているのが普通である。[12] コンディヤックも、もちろんこれら二つの意味を混同しているわけではなく、どちらの意味でgénieという言葉を用いているかは個々のコンテクストによって確定できる。

しかし、彼が問題としているのはまさにこの二つの意味の関係であり、génie という言葉のこの二義性がコンディヤックのキャラクテール論の場を形成していると言ってもよい。キャラクテールとしての génie は天才としての génie とどのような関係を持っているのか。この問題提起が、コンディヤック独自の発想によるものであり、彼のキャラクテール論の特徴の中核を成している。もちろん、これは単なる言葉の遊びではない。言語の特性と人間の能力の問題とは一見して結びつかないかのように思われるかも知れないが、コンディヤックの主張においては両者は不可分の問題であった。彼の認識論の中心を成す考えは、言語の発展と人間の認識能力の発展が相互作用のうちに行なわれるということであった。[13] この主張を、狭い意味での認識能力の問題に限定せず、美的な創作能力の問題にも拡張することによって、言語のキャラクテールと天才との相互発展という考えが提出されるのである。

以上が、コンディヤックによって設定された問題の場であるが、この場において展開される個々の主張について以下で具体的に検討することにしたい。

二　言語のキャラクテールの形成

コンディヤックは、言語のキャラクテールの形成の過程をまとめて箇条書きにしている。「以下が、才能の発展に協力する諸原因を、その順番に従って示したものである。1風土は一つの本質的な条件である。2政治体制が一貫した形をとり、それによって国のキャラクテールを定着させていなくてはならない。3このキャラクテールが、国民の支配的な趣味を表わす言い回しを増加させつつ、言語に一つのキャラクテールを与える。4他の多くの言語の断片で形成された言語においては、このことはゆっくりと起る。しかし、この障害が一度乗り越えられると、アナロジーの規則が確立し、言語は進歩し、才能は発展する。従って、何故偉大な作家がどの世紀にも同じようには生まれず、何故ある国においてはより早く、他の国においてはより遅く現われるかが分かるであろう。」[14]

この引用において示された彼の考え方の特徴をより明らかにするために、デュボスの天才論で提出された風土説[15]との比較を行なう必要があろう。コンディヤックのここでの主張は、明らかに、デュボスの論を前提として成されている。なぜなら、コンディヤックがここで発している「何故偉大な作家がどの世紀にも同じようには生まれず、ある国においてはより早く、他の国においてはより遅く現われるのか。」という問い[16]は、デュボスの提出した問い[17]と全く同じだからである。デュボスはこの問いに答えるために、空気や大地の自然因が決定的であることを主張し、これはデュボスの風土説と呼ばれている。

先の引用で明らかなように、コンディヤックは風土をも才能の発展のための一つの本質的条件であるとしながらも、それに止まってはいない。さらに重要なことは、政治体制が一定のキャラクテールをとることであるとしている。それでは、これはデュボスが自然因よりも劣るとした風俗因を再評価したということなのであろうか。そうではない。デュボスが風俗因として具体的に挙げているのは、芸術を奨励する君主やよき師に恵まれるということであり[18]、これ

らは才能の開花のための偶然的原因、いわば幸運であると言える。これらは自然的ではないという意味では社会的な原因であると言えるが、このような社会的な原因が考えられている際には社会の構造そのものが問題とされているわけではない。[19]これに対して、コンディヤックが政治体制を原因として挙げる時には、構造としての社会を問題にしているのである。彼はこの点をこれ以上に詳しく検討していないが、この方向を推し進めれば、後にルソーが『言語起源論』[20]で行なったような社会批判にも通じるであろう。

さらに、コンディヤックの思想がデュボスと決定的に異なる点は、自然的にせよ社会的にせよ外的な原因が直接人間の能力に作用するのではなく、言語を媒介として働くと考えていることである。言語を媒介とすることによって、外的条件が人間の内的能力に及ぼす影響は、より必然的な連関の中でとらえられる。[21]デュボスは、空気→血液→器官の働き、という生理学的影響関係だけによって外的条件の内面への作用を説明するが、この説明だけではどうしても説得力に欠ける。器官の働きがよくなることと思考能力の発展との間には質的な飛躍があり、ただちに原因と結果の関係にはなり得ない。これに対し、言語と思考能力との影響関係はより密接なものと考えられ、より説得力を持った原因－結果の関係を成す。外的な力が内化するという質的な変換を説明するものが言語であると言えよう。[22]

さて、デュボスが風土説によって解答を与えようとしたもう一つの問いを、コンディヤックもまた発している。それは次のような問いである。「我々に検討すべく残されたのは、何故すべてのジャンルでのすぐれた人物はほとんど同時代人なのかということである。」[23]この問いに対する答えが、コンディヤックのキャラクテール論の中心的かつ最も独創的な部分である。この答いに対して彼は、人間の能力と言語の相互発展ということで答えるが、その発展のいわば軸となっているのがキャラクテールという概念である。

三　言語のキャラクテールと偉大な作家の能力との相互作用

まず、言語の側からの作用について、コンディヤックは次のように述べている。「ある天才がある言語のキャラクテールを発見した時には、彼はそれを生き生きと表現し、自らの書くものすべてにおいてそれを保持する。残りの才能のある人々は、それ以前には自分自身でそのキャラクテールを洞察することはできなかったのであるが、この助けによって、はっきりとそれを認め、天才の例に従って各々が自らのジャンルにおいてそれを表現する。[24]」天才と単に才能のあるというだけの人とを分けるものは、言語のキャラクテールを自ら発見する能力を持つか否かである。単に才能のあるというだけの人々は、天才がそれを発見してくれれば、それに習って次々とキャラクテールを発見することができる。それゆえ、天才と才能のある人々とを合わせた偉大な人々はほとんど常に同時代人となるのである。これが先の問いに対するコンディヤックの解答であるが、ここで注目すべきは、天才は言語のキャラクテールを自ら発見する能力として示されていることである。従って、天才の出現の前提条件として、言語のキャラクテールが既にある程度確立していなくてはならない。天才は無から出発するのではなく、言語のキャラクテールの発見から出発するのである。

しかし、次に彼は、ひとたび天才がこのような発見をすれば、それによって出現する偉大な人々は、今度は逆に言語の発展に対して積極的に貢献することができるようになると主張する。「偉大な才能が発展するためには、その才能の出現の前に言語が既にかなりの進歩をしていなくてはならないが、言語が次にさらに進歩をして、進歩の最終的な段階にまで高まるためには、それらの才能の力を必要とする。[25]」コンディヤックは、言語がかなり進歩した段階と、最終的な進歩を遂げる段階とを区別して、才能のある個人の側からの言語への働きかけを認めている。その働きかけの際にも、媒介となっているのはキャラクテールという概念である。「偉大な人々は、どこかで自国のキャラク

テールに結びついているにもかかわらず、常にそれとは区別された何かを持っている。彼らは、自分自身に固有な仕方で見たり感じたりする。そして自らの見方、感じ方を表現するために、彼らはアナロジーの規則の中で、又は少なくともできる限りわずかにそれから離れることによって、新しい言い回しを考案しなくてはならない。それによって、彼らは自らの言語の特性に従いながら、同時に自らの特性を言語に与えるのである」[26]一方で国のキャラクテールに依存しつつもそれと区別されたものを持つとか、アナロジーの規則からできる限りわずかに離れるとか、言語の特性に従いつつそれに自らの特性を与えるとはいったいどういうことなのであろうか。ここで述べられていることは、一見して矛盾に満ちていると思われるかもしれない。しかし、よく考えてみるならば、我々に対する言語の規制力と個人の自由な見方、感じ方との緊張関係をこれほどみごとに表わしている言葉は多くないであろう。我々は自らが見たり感じたりしていることを自分自身で意識する時には既に言語を習得している。言語習得以前の見方・感じ方は思い出すすべもない。それでは、我々の感得能力はすべて言語によって規制されているのであろうか。そうではないであろう。言語も我々によってかつて習得されたものであり、感得能力がその前になければ言語の習得もできなかったはずである。問題はそのような習得の過程を我々が忘れてしまっていることに存する。それでは現段階では絶対的に見える言語の強制力をどうやってはねのければよいのか。この問いに対するコンディヤックの答えは、キャラクテールという形で現われてくる言語の法則を発見し、それを逆に利用して自らのキャラクテールを表現することにあった。彼はこの法則を〝アナロジー〟又は〝アナロジーの規則〟という言葉で表わしている。それでは、言語およびすぐれた作家のキャラクテールを規定する〝アナロジー〟とはどのようなものかについて、次に考察しなくてはならない。

四　キャラクテールを支える〝アナロジー〟

コンディヤックは、キャラクテールの決定されるのが遅くなる言語について次のように述べている。「（そのような言語は）他の国の言語の各々から何かを少しづつ採り入れたので、互いに関連のない言い回しの奇妙な推積でしかない。そこには、作家を啓発し、言語を性格づける（caractériser）あのアナロジーを見出すことができない」[27]（傍点筆者）。このように、言語のキャラクテールを決定するのは、様々な言い回しの相互のアナロジーである。

また彼は、キャラクテールを規定するものについて、アナロジーとは別の言い方で次のようにも述べている。「記号は、最初にそれを用いる時には恣意的なものである。それゆえに、記号はキャラクテールを持ち得ないと思われてしまうのであろう。しかし、各国が自らに固有な特性に従ってその観念を結びつけ、また主要な観念の素地に対し、異なって心を動かされるに従って異なった付属的な観念を結びつけるというのが自然であるように思われる。そして、長い間の慣例によって認められた（観念の）この組み合わせが、まさに国語の特性を構成するものである。[28]」ここでは、国語の特性を規定するものとして、観念の組み合わせということが挙げられている。従って、前述のアナロジーとは、観念の組み合わせに見出されるものであるということができる。観念の組み合わせが一定の法則を持つことによって、キャラクテールが形成されるのである。

しかし、観念の結びつけ方のすべての法則がキャラクテールにかかわるわけではない。『文章術』においては、観念の結びつけ方の法則に二種が区別され、キャラクテールにかかわるものは観念の連合（associations d'idées）という言い方で示されている。「文体は、偉大な詩人の精神ごとに異なる観念の連合に依存しており、自らの語る言語に自らのキャラクテールを与えることのできる天才が存在するのと同じだけの数の文体が存在する。これらの観念の連合は詩人の精神ごとに異なるが、さらにまた国民の精神ごとに異なる。各国民の精神は異なった慣例、風俗、キ

ャラクテールを持ち、すべての国民が一致して同じように自らの観念を連合させることはできないからである。」[29]ここでは、偉大な詩人および国民に特有なキャラクテールを規定するのは観念の連合のあり方であることが述べられている。

これに対して、彼は観念の連合とは異なるもう一つの観念の結びつけ方を挙げている。「思考の展開は、すべての言語において、観念の最も広範な結びつき（liaison d'idées）に従って行なわれなくてはならない。この点に関しては、すべての観念は同じ法則に従う。（中略）観念の連合（associations d'idées）は、その反対に各国語によって異なる。従ってこの連合を一般的な法則に従わせることはできない。」[30]これによれば、liaison d'idées は普遍的な法則に従うものであり、観念の論理的な結びつきであると言うことができる。これに対し、associations d'idées は一般的法則に還元できないものであり、偉大な詩人、各国民ごとに異なる。それは、慣例や風俗によって歴史的過程の中で形成されてくるものであり、言わば情緒的な観念の結びつけ方の型と言えるであろう。[31]

キャラクテールは、観念の連合の仕方に依存すると考えられているので、人間の広い意味での思考能力と密接な関係を持つことになる。コンディヤックは、天才を、新しい観念の組み合わせを発明する能力であると定義している。「我々は、厳密に言えば、観念を創造しはしない。我々のすることは、感覚から受けとる観念を組み立てたり分解したりすることによって組み合わせるだけである。発明の能力は新しい組み合わせを作ることができるということに存する。これには二種がある。才能（talent）と天才（génie）である。」[32]これに続く部分では、才能は既存の芸術や学問のジャンルの枠の中での新しい観念の組み合わせを作り出す能力であり、天才は新しい芸術や新しいジャンルをも生み出すような新たな観念の組み合わせを作り出す能力であるとして区別している。この天才の定義とキャラクテールが観念の連合の仕方の現われであることを考え合わせれば、先に何故天才が言語のキャラクテールの発見から出発すると言われたかが明らかになろう。観念の結びつき方の法則としてのキャラクテールの発見が、

観念を新たに結びつける能力である天才を発展させるのである。

また、コンディヤックは、このような発明の能力を構成する基本的な能力として分析能力と想像力とを挙げ、この二つの能力の配分の異なりが言語の様々なキャラクテールの異なりに対応すると考えている。「我々の考えを確かなものとするためには、二種の言語を考えてみる必要がある。一つは非常に想像力を訓練するので、その言語を話す人人が絶えず論理を外れるような言語である。もう一つの言語は、その反対に非常に分析力を訓練するので、この言語を母国語とする人々は喜びを感じている時でさえ、問題の解決を追求する幾何学者のようにふるまう。これら二つの極の間に、我々はすべての可能な言語を考えることができ、それらはどちらの極により近いかによって様々なキャラクテールを持ち、どちらか一方の極の言語の長所を持つとともに他方の極の言語の欠点をも合わせ持っている。」[33]

以上の考察によって、キャラクテールを規定する法則の具体的な内容とその法則と我々の思考能力との関係が明確となった。このことを踏まえた上で、先の引用にあった「偉大な作家によって言語の発展がその最終的な段階にまで引き上げられる」[34]とはどういうことであるかについて、さらに考察を進めてゆきたい。

五　言語の発展の歴史

天才による言語のキャラクテールの発見とは言語のアナロジーの発見である。このような言語の法則を発見することによって、天才およびそれに習う偉大な人々は、ある程度まで言語の支配をのがれ、自分自身の見方や感じ方を言い表わすことができるようになる。ここには、言語の強制と個人の自由の間の奇妙なパラドックスがある。個人は言語の強制をのがれ自分自身の見方、感じ方を言い表わそうとするならば、言語を無視しそれに反抗するのではなく、言語の法則を発見することができなくてはならない。そうすることによってのみ、言語を逆に支配し、自分自身の見

方、感じ方を他人に分かるように言い表わすことができるようになる。コンディヤックによればその結果は、自分自身のキャラクテールを言語に与えることができたということになるのである。そして、ひとたび自分自身のキャラクテールを言い表わすこと、すなわち自分自身のキャラクテールを言語に付与することができたならば、もはやそれは個人的なものに止まらず、その言語を用いる人々の共有の財産となる。このようにして、言語のキャラクテールはしだいに豊かになり、言語の発展の最終的な段階にまで至るのである。このことをコンディヤックは、フランス語に関してコルネイユ、ラシーヌ、キノーの例を出した後で次のように述べている。「そして、過去の人々又は現代人でもすぐれたその他の多くの作家は、各々一つのキャラクテールを持ち、それを我々の言語が少しずつ自らに固有なものとしていったのである。[35]」

このように、言語のキャラクテールは、言語の発展の歴史の中である時期にある程度まで確立したものとなり、その段階に至ると天才がそのキャラクテールを支えているアナロジーを発見できるようになり、その後はすぐれた作家の言語活動を通じてしだいに完成されたものとなってゆくのであるから、決してそれを固定的にとらえてはならないであろう。コンディヤックは、個々の作家のキャラクテールについては、コルネイユの高貴さ、力強さ、ラシーヌの甘美さ、優雅さのように具体的に述べているが[36]、各国語のキャラクテールについて具体的に述べていることは極めて少ない。唯一の例として、フランス語のキャラクテールについて正確さと明晰さを挙げているが[37]、これも「主要な」という形容詞つきで、決定的なものとして言っているわけではない。それゆえ、国語のキャラクテールとは確かにあるには違いないが、一つの形容詞で明確に規定できるようなものではないと考えなくてはならない。国語のキャラクテールは天才によって発見されるのであるから、ある意味では国語に内在していると言える。しかし、それは可能性としてあるのであって、具体的に実現されるのは個々の偉大な作家の言語活動によってである。多くの偉大な作家の

出現により、国語のキャラクテールがしだいに豊かになる。しかし、個々の作家の実現するキャラクテールは、国語の本来的なキャラクテールのアナロジーの規則の中にあるか、又はほんのわずかにそれを離れるだけであるから、国語のキャラクテールは豊かになりつつも一定の方向性を有し、全体としては一つのまとまりを保つのである。

ところが、このような発展の歴史はいつまでも続くわけではない。発展の後には退廃の時代がやってくる。

六　言語の退廃の歴史

国語に内在するキャラクテールの可能性が最大限にまで発揮されつくしてしまう歴史的な点がある。コンディヤックは、このようないわば飽和状態以後の歴史は言語の退廃の時代とならざるを得ないと主張している。この時代にも、才能のある人々は独創的であろうと努力する。「しかし、言語のキャラクテールかつ自らのキャラクテールに類比的（アナログ）な文体はすべて先行する人々によって把えられてしまっているので、彼に残されたのはアナロジーから離れることだけである。従って、独創的たらんとすると、一時代前であったなら言語の進歩を速めたであろうが、この時代では言語の荒廃を準備せざるを得ない。[38]」これは、国語のキャラクテールの汲み尽くされてしまった時代の不幸である、としか言いようがない。このような傾向がさらに進めばどうなるであろうか。「まさにこの時、抜け目のないこじつけの思想、気取った反対命題、才気煥発な逆説、内容のない言い回し、凝った表現、必要のない造語、そして一言で言うならば、間違った形而上学によって堕落させられてしまったすぐれた精神によるわけのわからぬ言葉の王国が生まれるのが見られる。[39]」

この不幸な状態から抜けだすにはどうしたらよいのであろうか。コンディヤックの理論に従えば、独創的たらんとすることをやめるか、言語の本来的なキャラクテールそのものが別のものとなるしかない。彼はこの問題を取り挙げ

て解答を与えようとはしていないが、次のように指摘している。「このキャラクテールを完全に変えることは一人の人間の力ではできない。キャラクテールからはずれてしまえば、他国の言語を話すことになり、理解されなくなってしまう。ある国民全体を今までしていたのとは全く違う仕方でものごとを考えさせるような状況に置くことによって、言語のキャラクテールが変わってしまうほどはなはだしい変化をもたらすのは時である。」[10] 一人の人間がいくらもがいても、言語のキャラクテールを完全に変えることはできず、時を待つしかない。この点では極めて悲観的な見解である。しかし、時によってキャラクテールの全面的な変更がもたらされる可能性は認めているのであるから、言語の退廃の時代が永遠に続くのではなく、いつかまた進歩発展の歴史に転化するわずかな期待は残されていると言えよう。

結　論

以上の考察を通じて明らかにされたように、コンディヤックのキャラクテール論の最も中心となる考えは、偉大な作家の天才と言語とは各々のキャラクテールを媒介として相互に影響を及ぼしあい、それによって歴史的に発展するということである。言語と思考能力の相互発展という発想は彼の認識論の主要な柱であり、この考えは創作能力を取り扱う美学的な考察においても貫かれている。

このようなキャラクテール論によって彼が説明しようとした美学上の問題は何なのかと我々は問うてみることができよう。それは、文学の歴史における伝統と創造との関係の解明であった。我々がしばしば経験することであるが、伝統のない所には創造もなく、創造は伝統に支えられているように思える。しかし、単なる伝統の継承は創造性を枯渇させる。創造は伝統と対決しなくてはならない。このような伝統と創造との逆説的な関係の、一つの美事な説明がコンディヤックのキャラクテール論である。天才は言語のキャラクテールの発見から出発し、それを乗り越えること

によって今度は逆に自らのキャラクテールを言語に付与するのである。

このような相互作用が可能となるのは、伝統（コンディヤックの言い方では言語のキャラクテール）が、ある言語に特有な思考の型の現われとしてとらえているからに他ならない。この思考の型は何らかの法則を持つ。我々が既存の思考の型の束縛からのがれるためには、この法則を発見し支配して、それを自分自身の見方や感じ方と関係づける以外に方法がない。そして、このことに成功した人間が天才と呼ばれるのである。

それゆえ、コンディヤックが「言語のキャラクテール」「作家のキャラクテール」と言う時には、それは単なる性格ではなく価値を含んだものであると言うことができる。何らかのキャラクテールを示し得るということは、その言語又は作家がすぐれていることの証となっている。この価値を支えているのは、観念の結びつきの持つ法則である。しかも、この法則はある言語に可能性又は方向性として内在するものではあっても、決して固定したものではなく、具体的な言語活動を通じて豊かになり完成へと向かってゆくものである。

言語の価値を支えるこのような力動的な法則を設定することによって、コンディヤックは創造における新しさの意味を明らかにしている。創造とは過去と決別して今までになかったものを創ることではない。単なる新しさの追求は、コンディヤックの示して見せたような言語の退廃を招くものである。創造の新しさとは、言語の完成の歴史を一歩前進させるという意味で新しいと言えるようなものである。それは、それまでの言語活動の蓄積を担いつつ前に進むものでなくてはならない。このことこそ、すぐれた作家はどこかで自国語のキャラクテールに従いながらも自分独自のキャラクテールを自国語に付与するという言い方でコンディヤックの示したことである。まさに、このように考えることによって始めて、伝統と創造の関係の真のあり方を理解することができるのではないであろうか。

註

(1) 「シャバノンの音楽論、―模倣からキャラクテールへ――」、『美学史研究叢書』第六輯、今道友信編、昭和五十六年、五一―七八頁、及び、「シャバノンにおけるキャラクテールの概念、――ケルナーとの比較を中心として――」、『音楽学』第二七巻②、音楽学会編、一九八一年、九八―一〇九頁。

(2) Patrick Coleman, "The Idea of Character in the *Encyclopédie*, Eighteenth-Century Studies, 13, 1979, pp.21～47.

(3) Tokuzo Miyagaya, "Notes sur Condillac, Diderot et Rousseau, ――Leur théorie sur l'imagination――" 神戸大学文学部紀要、1970, pp.61～75 中川久定、「十八世紀フランスの言語論」、『思想』一九七二年二月号、大塚忠秀「コンディヤックとルソーの言語論」比較文化研究、東京大学、一九七二年、pp.213～254を参照。

(4) シャバノンはその著作《De la musique considérée en elle-même et dans ses rapports avec la parole, les langues, la poèsie et le théâtre》(reprint of 1785 edition, Genève Slatkine, 1969, p.43)で、コンディヤックの『人間認識起源論』の序文から一文を引用して自らの主張の傍証としている他、"De la musique…"の付録に相当する部分で、「諸言語の特性」について論じているが、これは以下に考察するコンディヤックのキャラクテール論を前提として書かれたものであると思われる。なお、コンディヤックの音楽論に関しては、拙稿「コンディヤックの音楽論、――『人間認識起源論』を中心として――」、『美学』第三十三巻第四号、美学会編、一九八三年春、三七―四八頁参照。

(5) I. F. Knight は "The Geometric Spirit ― The Abbé de Condillac and the French Enlightment ―", New Haven and London, Yale University Press, 1968, の第七章「経験的美学と古典的理想の崩壊」において、コンディヤックが各国語に固有のキャラクテールを認め文学の美の相対性を認めたことを評価しているが、キャラクテールと天才との関係、及び、キャラクテールの概念そのものについては十分に考察していない。J. L. Labarrière, "Le génie et le jeu dans *l'Essai* de Condillac", in *Condillac et les problèmes du langage*, éd. par Jean Sgard, Slatkine, Genève-Paris, 1982, pp.103～113 は、コンディヤックの天才論を『人間認識起源論』の第Ⅱ部、第十五章を中心として考察している。しかし、ここでもキャラクテールの概念の内容は検討されておらず、また『文章術』に関する言及は全くない。

⑥ E. B. de Condillac, *De l'Art d'écrire*, édition de 1798 in Œuvres philosophiques de Condillac, texte établi et présenté par G. Le Roy, Paris, P. U. F. 1947～1951, t. I, pp.517～611.

⑦ *Ibid*. p.517.

⑧ Condillac, *Essai sur l'origine des connaissances humaines* (1746), précédé de L'archéologie du frivole par Jacques Derrida, Editions Galilée, 1973, (Le Roy のテキストでは t. I, p.4 以下) 以下本論では *Essai* と略述し、Galilée 版のテキストの頁数を引用する。

⑨ 文体の美を明晰さ (netteté) とキャラクテールの二つの要素に分けるという考えは、『人間認識起源論』ではいまだ明確には示されていない。しかし、この著作でも彼はボワローの主張を挙げた後でそれを補って、美と真の関係について次のように述べている。「真以外に美しいものはない。しかし、真であるものすべてが美しいわけではない。真を補足するために、想像力は真を飾るに最もふさわしい観念をそれに連合させる。そして、この結合によって想像力は、緻密さ (solidité) と楽しみ (agrément) の見出される一つの全体を形成する。」(*Essai*, p.149) 美は一つの全体であるが、そこには二つの要素が見出されなくてはならない。美は真と完全に一致するのではなく、真を飾るものとしての楽しみがつけ加えられたものである。このように、美を真プラスアルファーとする考えの図式は、『文章術』と基本的には同じものである。また、真を飾るためには、「想像力がそれに観念を連合させる」と言っていることから、ここでの考えは、同著作の第Ⅱ部十五章のキャラクテール論および『文章術』での考えにつながってゆくものと考えられる。

⑩ *Ibid*. pp.259～267. Chapitre XV, "Du génie des langues"

⑪ この点は、J. L. Labarrière の前掲論文 (註(5)) p.103 で指摘されている。以下、引用の際にはこの意味での génie を特性と訳し caractère は原語のままキャラクテールと記すことにする。

⑫ 例えば、Petit Robert では、génie の項目の一つとして、「あるものの本来的本性を形成する弁別的性格 (caractères distinctifs qui forment la nature propre d'une chose)」という定義があり、十七世紀からの用法として出ている。しかし、辞書にこの意味が独立した項目として載るようになったのはそれほど古くからではない。例えば、アカデミーの辞書の第一版 (一六九四年)、Furetière の辞書 (一六九〇年)、百科全書の第一版 (一七五二年) には、この意味を挙げた項目は見られない。現在確認することのできた最も古い例としては、アカデミーの辞書の第七版 (一八七七年) にこの意味を挙

げた独立した項目が見出され、「本来的で弁別的性格（caractère propre et distinctif）」を意味するとある。しかし、前述の（註(4)）シャバノンの“De la musique…”（一七八五年）の付録として載せられている「諸言語についての考察」の冒頭に、「ある言語の génie と言えば、その言語の本来的で弁別的な性格（caractère propre & distinctif）を意味するとアカデミーの辞書に書いてある」という記述がある（p.399）ので、この時までには既にアカデミーの辞書にこの意味の独立した項目がつけ加えられていたと考えられる。

(13) コンディヤックの認識論の特徴については拙稿、前掲論文「コンディヤックの音楽論」（註(4)）で簡略にまとめておいた。pp.38～39.

(14) Condillac, *Essai*, p.263.

(15) Du Bos は《Réflexions critiques sur la poësie et sur la peinture》(1719), Reprint of 1770 edition, Slatkine Reprints, Genève, 1967. の第Ⅱ巻で天才論を展開し風土説を提出している。この点については、木幡瑞枝、「ジャン＝バチスト・デュボスの芸術哲学――風土説を中心として――」『美学史研究叢書』第三輯、今道友信編、昭和四十七年、九－三五頁を参照。なお、この論文は「ジャン＝バチスト・デュボスの詩画論」、『美学史研究叢書』第二輯、昭和四十六年、の続編である。

(16) Du Bos, 前掲書、第Ⅱ巻、p.154. デュボスが自然因を検討するために挙げる三つの問いのうちの第一のものに相当する。

(17) *Ibid.* pp.249～328. 参照。

(18) *Ibid.* p.136.

(19) この点は前述（註(5)）の J. L. Labarrière も指摘している。特に pp.103～104.

(20) J. J. Rousseau, *Essai sur l'origine des langues* (1761?) 特に、第十九章、第二十章。

(21) Du Bos, 前掲書、pp.250～251.

(22) *Ibid.* p.155. 註(15)で述べた三つの問いのうちの第三の問い。

(23) Condillac, *Essai*, p.263.

(24) *Ibid.* p.263.

(25) *Ibid.* pp.263～264.

㉖ *Ibid.* p.264.

㉗ *Ibid.* p.261.

㉘ *Ibid.* p.266.

㉙ Condillac; *De l'Art d'écrire*, p.606.

㉚ *Ibid.* p.606.

㉛ もちろん、この二種の観念の結びつけ方は文体の美にとってともに必要なものと考えられている。先に引用した『文章術』の冒頭部分（註(7)）で挙げられた「明晰さ」にかかわるのが liaison d'idées であり、「キャラクテール」にかかわるのが associations d'idées である。

㉜ Condillac, *Essai*, p.152.

㉝ *Ibid.* p.265.

㉞ 註(24)の引用を参照。

㉟ Condillac, *Essai*, p.264.

㊱ *Ibid.* p.264.

㊲ *Ibid.* p.264.

㊳ *Ibid.* p.266.

㊴ *Ibid.* p.266.

㊵ *Ibid.* pp.266～267.